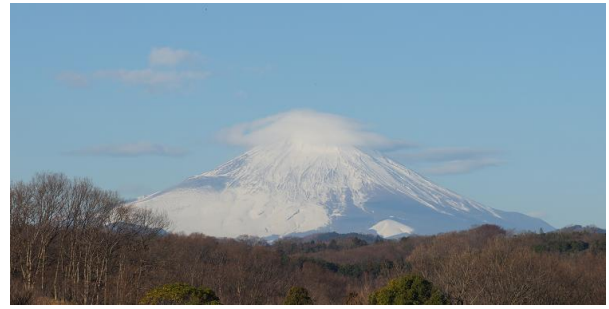


<ひとつ笠>日の出にはすっきりと見えていた富士の頂は日が昇るとともに湧き立つ雲ですっぽりと覆われることがよくあります。暖められた山の斜面から蒸発した水分が風に流されて頂上で雲になるのでしょうか。笠雲と言われますが調べてみると雲のかかり方と形で二十ほども呼び名があるのですね。写真の雲はやや不完全な“ひとつ笠”、2重にかかれば“二階（にがい）笠”そして頂から離れて丸い円盤のように見えるのが“離れ笠”といった按配です。



<氷の作品>ひとつ笠の富士を背景にしたビオトープの林はほとんど灰褐色です。しかし木々の根元や池の周りの朝方はきらきらとした白の目立つ世界です。この冬の厳しい寒さで毎日のように降りる霜のおかげです。いろんな氷の作品に出くわしますが、まずは霜を纏ったガマの穂です。いささか強引ですが、背後からの風に白い衣をなびかせて天を指差すお地蔵さんのように見えませんか。次は霜の降りたネコジャラシの穂です。周りに落ちて



<霜を纏ったガマの穂>

いる枯れ枝や枯れ葉に比べ上手に霜を纏っています。こんな砂糖菓子があってもいいかなとも思います。三つめはドングリの落ちていた斜面に顔を出した霜柱、と言うよりも“霜カール”です。氷になりきるより速く水が地面から上がってくるため重みに耐えかね曲がるのでしょうか。はるさめ、ビーフンやベトナムのブンのようですね。



<ネコジャラシの穂に降りた霜>



<霜柱ならぬ霜カール>

<静と動>このところ池には毎日のように氷が張っています。水面に落ちた枯れ葉や枯れ草は固められて微動だにしない静寂の世界です。ところがあたりの明るさが増してカモがやってくる



<カルガモのカップル>

と池の景色は一変します。底までが浅いためカモの動きで沈んだ泥が舞いあがり水面（みなも）は波立つグレーに変わります。写真は驚かさないように遠くから忍び寄って撮ったカルガモのカップルです。右を泳ぐのがオスで左がメスです。(文と写真：松本正勝)



<枯れ葉、枯れ草、氷>